

## ワンポイント・ブックレビュー

中野麻美著『労働ダンピング - 雇用の多様化の果てに』岩波新書（2006年）

ダンピングとは海外の市場においてシェアの拡大を目指すため、国内市場より大幅に値引きされた製品を販売する“不当廉売”を指すが、本書ではこれを労働、ひいてはそれによって支払われる賃金に対する言葉として使用している。ILOフィラデルフィア宣言に謳われる「労働は商品ではない」という原則に反して、労働が商品化されている、それも大幅に値引きされた商品になっている実態を、雇用の多様化をキーワードとして検討している。

この労働が商品にすりかわるひとつの大きな要素として検討されているのが、“派遣”という働き方である。この間の労働者派遣に対する規制緩和が、派遣元における競争を激化させ、派遣労働者が「商品」としてダンピングに巻き込まれていく様が法制度や職場の実態を通して描かれている。そして、この派遣労働者のダンピングが、正規雇用の労働者の条件・働き方にも影響を及ぼしていることへの警鐘が鳴らされており、労働時間、働き方の実態から、現在すでに正規雇用の労働者でもダンピングの対象となっている現実が示されている。さらに、今後再燃するであろうホワイトカラーエグゼンプションの問題がそれを助長することも予測されている。

著者は、このような多様化を引き起こした原因のひとつに女性の働き方に対する差別があることを指摘する。「男は仕事、女は家庭」という日本に根強く残る性別役割分担の観念が多様化、格差の背景にあるという。このジェンダーの視点による分析は、本書のサブテーマともいえ、「隠された差別を可視化する」とした第4章を中心に展開されていく。ここでの検討は、単に賃金、収入による格差だけでなく働き方やコース別管理の問題、さらに少子化といった社会全体の問題にまで及んでいる。そして、このような問題の解消策に向けて、法律の問題点の指摘、オランダ・モデルの検討などがなされている。

さらに、第5章「現実の壁に向かって」で、ダンピングや格差に対して公正な働き方を実現するための運動が紹介されている。もちろん、ここに問題への解消策が示されているが、問題の指摘や非正規雇用の厳しさ、派遣労働の是非などを描いていた前半部分と比べると、具体的な提起はもうひとつ物足りない感があった。新書というスタイルの限界もあるだろうが、本来であればもう少し詳細に書いて欲しかった内容がかなり圧縮した形でまとめられているように思われるのが残念である。

なお、著者が弁護士ということもあり、主軸は法制度からの検討であるが、随所にルポや各種調査の結果が交えられているため、働くものの実感を損なうものではない。ただし、その分厳しさの実態が如実に示されているといえるため、読み進めていくとどんどん暗澹たる気持ちになってしまった。本書中のルポでも労働組合がダンピング、格差に立ち向かう姿もいくつか描かれているが、このような姿が多くみられるようになることを期待したい。労働組合にできることは少なくないはずである。（T・K）